

平成 22 年度保育サポーター研修会

と き 平成 23 年 3 月 13 日(日)

ところ 山口県医師会館 6F 会議室

[報告:理事 田村 博子]

山口県医師会の保育相談窓口及び保育サポーターバンクはサポーターの登録者も順調に増え、利用した女性医師から大変喜ばれている。これは山口県の女性医師等保育支援事業を受託して行われているものであるが、県内関係者からも高い評価を受けている。また平成 22 年 12 月 3 日、日本医師会で開催された女性医師等相談窓口事業推進連絡協議会では全国から 9 都道府県の 1 県として山口県医師会の取り組みを報告し、他都道府県から大きな関心が寄せられた。

平成 21 年 7 月に相談窓口事業が開始されてから平成 23 年 4 月までの相談件数は 27 件で、そのうちサポーターバンク利用は 13 件。保育サポーター登録者は 102 名(平成 23 年 4 月時点)であるが、萩、長門、柳井には登録者がいない。

昨年は 3 月に第 1 回保育サポーター研修会を開催したほか、10 月には保育サポーターバンク通信を発行した。サポーターからのアンケートで子どもの心理面についての研修を希望される方が多かったため、今回の第 2 回研修会では臨床心理士による講演を企画した。当日は 34 名の保育サポーターが出席され、アンケートではほぼ全員から有意義であったとの評価を得た。

研修会は女性医師参画推進部会の松田昌子部会長の挨拶に始まり、部会理事の上田聡子保育サポーターバンク運営委員長から保育サポーターバンクの説明があった後、山口市周辺で幅広く活動する臨床心理士の栗原郁子先生に「子どもの世界によりそうために」という演題で講演をしていただいた。具体例も多く盛り込んでわかりやすいお話であったが、ここではごく概略を報告し、その後の地区別昼食懇談会での意見などもご紹介したい。

講演「子どもの世界によりそうために」

臨床心理士 栗原郁子

まず、子育てに失敗も成功もない。子ども相手の仕事は未来をみることであって、仕事が逆に自分自身の力になることもあるので、サポーターの仕事は是非がんばってほしいし、また子どもを腫れ物に触るように対応する必要もないことを理解してほしい。なぜ乳幼児期が大切かというと、この時期にいろいろな人とのやりとりを通じて人が社会で生きていくための基礎が作られるからである。

次に子どもの発達を胎児期、新生児期、乳児期、幼児期、児童期、青年期と段階を追って説明する。胎児期はその時期のうちに知識をというようにいわゆる胎児教育よりも母親の感情が大事である。乳児期には探索行動により、その後の認識と人間関係の発達や言語発達の土台ができ、また後述の愛着(attachment)が形成されてくる。幼児期には自我が芽生え始め、第一反抗期にさしかかるが、ここで駄目なことは駄目と教える必要がある。児童期は低学年と高学年では大きな違いがあり、中学生になると第二反抗期に入る。ここでは親はとにかく日常生活を淡々と支え、見守り、困った時に手を差し伸べるという姿勢が大事である。

次に幼児期に大切な「愛着関係」についてであるが、愛着(attachment)とは子どもがもつ生まれながらの本能で、何らかのことで危機や不安というネガティブな情動が喚起されたときに、それを養育的、保護的な立場にある者とくっつく、あるいは絶えず接触していることによって、低減・調節しようとする行動制御システムのことである。子どもが愛着行動(たとえば、赤ちゃんの発声やしがみつきなど)で発信する信号にきちんとこたえることで愛着関係が育ってくる。ただ現代

人は総じて鈍感になってきており、これを自覚し、基本的信頼関係を築いていくことが必要である。

しつけは「社会的存在」「文化的存在」へと育むものであり、社会で生きられるよう繰り返し伝えなくてはならない。

子どもの発達には個人差があり、同じ「言葉が出ない」のも遅いだけの場合も障害による場合もあり得る。

気になるときは、小児科が敷居が高いようであれば保健センターに相談されるとよい。

子どもに対しては世話以外に一緒に遊ぶことが重要である。遊びの中に対人関係の基礎があるし、おもちゃという道具が介在することで三者関係ができ、また遊びを通して五感を育てることができる。絵本は知識を与えると言うより、膝の上で声を聞きながらという体験が子どもの感性を育てるので、焦らず年齢にあったものを選ぶとよい。

現代の子育ての辛さは、以前は家族、地域、社会での子育てがあったものが、母親ひとりっきりの子育てであることも多いこと、情報が散乱して何を頼りにしていいのか途方にくれること、それに比し体験が圧倒的に不足しているため、感性・社会性が育たないことによる。

最後に事前の質問に対して「こどもが反抗してきたら」「上の子への対処法」「気になるサイン」「子どもがきれたときの対処法」について参考程度ではあるが回答する。

しめくくりになるが、今の時代、この社会では感性が育ちにくくなっている。育つ段階でいろいろな人がかかわるというのは、今の子どもにとってある意味大変贅沢なことであるので、サポーターが支えてくださることは子どもの将来にとってとてもプラスになると考える。どうぞ感じられるままに接して、いろんな立場からの意見を情報交換してほしい。また、女性医師には、価値観は違って当たり前なので、預けたからには預けた人の価値観を大事にし、おおらかな気持ちで預けてほしいと思う。

地区別昼食懇談会で

講演後、下関、山陽小野田、宇部、防府・山口、周南の地区ごとに別れ、各グループに保育サポ-



ーターバンク運営委員会のメンバーも加わって昼食懇談会を行った。自己紹介などを通じて、皆さんボランティア精神に富んだ信頼できる方のように感じられた。ファミリーサポートセンターを通じて仕事をされている方もおられたが、医師会の保育サポーターに登録したものの仕事がないので、登録を取り消そうかと思っていた、とおっしゃる方もおられた。利用者である女性医師とサポーターの交流会を開いては、という意見もあった。

研修会を終えて

保育サポーターの登録者は 102 名と増えたものの、これまでのサポーター利用が 13 件と仕事が少ない。「役に立ちたい」との意欲をもって登録してくださっているサポーターに対して、サポーターバンク運営委員会の一同は申し訳ないような気持ちになった。一層の広報努力とせっかくのサポーター登録を無にしないような対策(例えば、保育施設を立ち上げようとしている病院での活用を考えるなど)が必要と思われた。

桑原先生のお話しは、大変わかりやすく参考になったというサポーターからの感想が多く、バンク運営委員からは現在及び将来子育て予定の若い女性医師にも聞いてほしいという意見があった。「子育てに成功も失敗もない」という言葉は子をもつすべての人にとって励まされる言葉だと感じた。

最後になるが、この事業が大変評価を得ているのは、信頼できるサポーターの皆さんと誠意をもって親身にコーディネートしてくださる保育相談員のご尽力に負うところが大きいと改めて感じた。感謝して、皆さんの能力と意欲が発揮できるよう、私たちも考えていかなければならないと思う。